

石工のルーツ

菰野石

菰野石、朝明石といわれ、朝明川、三滝川筋の上流に産する花崗岩は、火成岩の一つ、深成岩であるマグマが地下の深いところで冷却して生じたもの。花崗岩の主成分は石英、長石、黒雲母である。21種類がある。六甲山の麓、神戸市御影で多く産出したので「御影石」という。

石の利用の始まり

田光、杉谷に分布する古墳の石室、天井石に使われている。農道、里道の石橋、道路の石積み、生活用の井戸側、流し、米搗き臼、粉ひき臼、茶臼、神社の鳥居、燈籠、手水鉢、墓碑、石仏、建築土木用の土台、段石、水路橋、造園用の崩れ石、沓石、蹲、反橋など、細工物の大半は主の近世から作られるようになった。

石工

石屋ともいう。大別して石切り（採石）、大工（石細工）、石積み、石垣を積む仕事をすする職人。

穴太積石工

穴太村（滋賀県大津市）に集団で住み、九人の穴太頭の下に300人ほどの穴太積みの技術を習得した職人がいた。信長の安土城の築城をはじめ、諸大名の城普請に動員され、城の石垣を主に手がけた。穴太は、古代の景行、成務、仲哀天皇の三代の都、穴穂宮がここにあった。漢人系の渡来人が集団で居住、付近に300基ほどの群集墳が現存する。（大津市史）

和泉石

大阪府泉南丘陵地に堆積岩の和泉妙岩が産出する。灰緑色で石英、長石、緑泥石が海底で堆積したもの、蓬色を呈し細工物に向く良質の石。

石棺

泉南地方の古墳の石室に和泉石が用いられ、長持形の石棺が発見されている。泉南の井関山の麓に箱作村があるが、石の箱、石棺造りの石工が居住していたので村の名が箱作村になっている。

箱作村

阪南市箱作（南海電鉄・箱作駅）享保6年（1721）村高2105石・人口1211人。庄屋2人・組頭13人の大村。神社は加茂、貴船、天神、八坂。寺院は観音寺（臨濟宗妙心寺派）、宗福寺（浄土宗）、青龍院（日蓮宗）。

出稼

寛文9年（1669）岐阜市三輪神社鳥居、藤原永次。寛文11年（1671）関市白山神社鳥居、藤原長次。元禄16年（1703）関市小屋、春日神社鳥居、藤原永次。恵那、松本、阿波、摂津、美作、丹波、大阪、松坂方面へ石工として出稼ぎに出ている。（阪南町史）

黒田村

阪南市黒田へ（南海電鉄、尾崎駅下車近くに市役所あり）江戸期、村 760 石・戸数 69 戸、人口 354 人。神社 神明社、稻荷社、寺院 黒田寺（浄土宗）。寛永 7 年（1630）駿河大納言忠長が母崇源院、供養のため高野山奥の院に大五輪塔を建立した。その作者が黒田村石工甚左衛門であった。宝暦年間、井関山の石切り場からの採石が禁止となり、このため石工は各地へ離散した。明暦 2 年（1656）黒田村石工佐右衛門、美濃鶴沼（各務原市）に移住。

桑名へ

桑名の石工根来市蔵の先祖も黒田村の出身、黒田寺には根来氏の立派な墓碑が残されている。竹成の五百羅漢を造った藤原長兵衛も黒田村の出という。

杉谷村へ

宝暦元年（1751）のころ、黒田村の石工中野伝七、桑名を経て杉谷村へ移住。和泉屋の屋号で店を開き、弟子をとり育成する。

千草へ

享保 15 年（1730）和州日根郡箱作村石屋長右衛門、桑名鍋屋町に仮住まいのあと、千草村へ移住。箱作村庄屋から千草村庄屋宛の人別送り状が出されている。（千草村辻家文書）